



史上初！手術中に衛星回線でライブ討論

医療最前線「これが最新心臓手術」の現場だ

写真・構成 伊藤隼也



▲テレビカメラのほかに、小型のカメラも使用して多角的に撮影



▲三重県津市の会場には、医師ら医療関係者が約200人集まった

「欧米と違い、日本では同じ手術でも、医師によって方法が異なる。医師免許取得後の研修制度が統一されていないため、大学、教授によって手術の指導法がさまざまだからだ。さらに、医師の横の繋がりも希薄なので、意見交換をして手術の質の向上を図るのも難しい。今回の試みは、いわば医師間の情報公開、活発に討論することで、「医療のスタンダード」を確立する画期的な一歩となった」（執刀を担当した神奈川・大和成和病院の南淵明宏医師）

7月5日に、三重県津市で「第3回日本OFF-PUMP CABG研究会」が開催された。京都大学で同時に行われた例の冠動脈バイパス手術（硬化した心臓の冠状動脈に新しい血管を縫い付ける）を、衛星通信で三重の会場にライブ中継。スクリーンに映し出

された手術風景を交互に見比べながら、会場の医師たちが、執刀医と「自分ならこうする」などと、リアルタイムで議論したのだ。本誌は日本初のこの試みを独占取材。東京・新葛飾病院の吉田浩紹医師は、感想をこう語る。

「普段は井の中の蛙状態、情報交換する機会がないので、ほかの医師の優れた技術を学べて、とてもよかった」

医療過誤が続発し、患者の信頼が揺らいでいる日本の医療。手術法が統一されていないとは驚くばかりだが、根本的な問題は、「患者第一」という基本が徹底されていない。研究、論文が優先される傾向がある（主催者の京都大学医学部 米田正始教授）ことだろう。患者中心の医療を実現するために医学界は、一日も早く内部情報を公開しなければならぬ。



心臓の左下部から伸びる赤く長い管が、縫い付けられた新しい血管。人工心臓を使わない「オフ・ポンプ」方式は人体への負担が少ないが、心臓を停止させずに執刀するので、高度な技術が必要とされる。右上の吸盤は術中に心臓を持ち上げるための器具